

無題

北海道 太田隆夫

大正十三（一九二四）年生まれということで、昭和十九（一九四四）年の春、私は徴兵検査がありました。当時の若者は、徴兵検査で甲種合格になるということが非常に誇りでもあり、国のためにこれから尽くせるんだなと思った次第であります。そして喜び勇んでおりましたら、昭和十九年の九月にいわゆる赤紙といいますが、召集令状が参りました。当時、もうサイパンで玉砕だとか、日本は危ないなという考えも私は持っておりますけれども、当時の教育からいって、ああ、この戦争は侵略戦争だった、あるいはまた負け戦だなんていうことを口にも出せませんし、そんなことも思わない。そんな状態の中で、何とか国のために尽くすんだという思いで、喜び勇んで、歓呼の声を受けながら駅頭に立った覚えがあります。

そして、昭和十九年の九月に旭川に集合して、それから満州の—今の中国の北です—ジャムスというところの第三九〇九部隊の第二中隊、これは重機関銃部隊ですけれども、それに入隊したわけですが、重機関銃というのは、ご存じの方もあろうと思いますが、六〇キロの重さがあるわけですね。それを分解して、歩兵の後ろから前に突撃する。そして、敵襲があっても重機関銃が一番ねられますので、非常に厳しい訓練が毎日続いたわけですね。そして、ふだんの行軍は、重機関銃を馬に乗せて行軍するものですから。弾薬もそうですね。内務班には馬もいるし、照準も当たっていないし、機関銃の手入れもしなければいけないというところで、歩兵の倍以上の働きがあったと私は思っておりますが、それにも耐えて何とか検閲等が終わったわけです。

昭和二十年の三月に関東の精鋭部隊が全部沖縄あるいは台湾の方に出動したわけです。私は幸か不幸か、ちょうどそのときおできが足にできました

て、病院通いをしてもらったものだから、この選考に漏れた。そのとき大変悔しかったけれども、後で聞くと、戦友は沖繩で戦死したり、途中の輸送艦で沈没したり、そんなことで不幸中の幸いだったと思っておりますが、いずれにしても、残った関東軍も、私の見た限りでは残留部隊と言つて、精銳は沖繩の方へ行つたし、これからどうするんだと考へておりましたけれども、昭和二十年の六月ごろですか、ジャムスからちよつと離れたホウマサというところでざんごう掘りの作業に今度従事することになった。

これは何をするかというと、ソ連の敵襲に備えてざんごうを十メートルぐらいの深さに掘るわけですから、裸になって、毎日我々はやつた。そうしているうちに、八月の初めだと思ひますが、作業の中止の命令が出たんです。どうしたのかなと思つと、中隊長いわく、日本は戦争を中止するんだ、これから天皇の放送があるから皆さんよく聞くようにということで、整列してラジオの放送を

聞いたんですが、何を言っているか天皇の声は全然聞こえないで、ただガーガーという雑音が聞こえた。後ほど中隊長は、天皇は日本の民族を守るためにケイケンをしたということで、これは負けたんだなど私は兵隊の中ではつぶやいておつたわけです。

そして、ホウマサからまたジャムスの方にちよつと戻つて、毎晩野宿をすることになった。そのうちに八月十五日か十六日にソ連の進攻が始まつた。これは重戦車で、我々の見たことがないような大きな戦車の上に兵隊が四、五人乗つて、いわゆるマンドリンという軽機関銃をこちらに向けてどんどん入つてきた。その中に女の兵隊もいたということが私は非常に奇異に感じたんですね。

そうこうしているうちに、我々は次の日かその次の日に武装解除ということで、機関銃も小銃も、それから帯剣をつつておりましたので、こういうものを全部放棄して丸裸になつたという格好です。それからジャムスの近郊で一カ月ぐらい野宿

をしていた。することもなく、軍律はもうなくなつたから兵隊としては非常に楽だつたですが、食糧がなかったので、自分の万年筆だとか、あるいはハンカチだとか風呂敷等をまんじゅうに交換して、スイカをもらつたり、あるいはカボチャを買つたりということで、夜には隊を組んで三人か四人で、食糧調達という名前はいいけれども、かっぱらいですね。農家の方に行つて、芋とかカボチャとかトウキビをかつぱらつてきては飢えをしのいだという経験がございます。

たまたまジャムスには陸軍病院もございましたので、その看護婦さんたちも我々の横の方に野宿をしておりました。毎晩ロスケが暴行に来たんでしょう。「キヤー、助けてくれ」という声が毎晩随分響いたんですが、そのうちに看護婦さんも全部丸坊主にして、軍帽をかぶせ、ぼろぼろの軍服を着て、顔にはすすを塗つて真っ黒にして、それからソ連の方にも通達があつたのでしようけれども、そういう暴行の様子は聞かれなかった。

そんなことで一カ月がたちまして、昭和二十年の九月ごろ、今度はいきなり行軍するんだということで、小銃は持つておりませんが、隊を組んでどんどんと行軍した。この行軍も途中大変なことがございまして、三日ぐらい飲まず食わずで歩いたんですが、満蒙義勇軍の奥さんたち、子供たちの「兵隊さん、助けてくれ」というかけ声を随分聞きました。しかし、我々は小銃もない、本当に丸裸ですから、自分が歩くのがやつとで、助けることもできないという悲惨な光景は随分ございました。

それから三日後にウツリユウ港から船でハバロフスクという町の第5收容所に私は收容されたわけです。收容された兵舎は、皆さんもご存じのとおりバラックづくりで、二段のベッドがずっと並んでおりまして、外は鉄条網で、ロスケの兵隊が絶えず監視している。そういうようなところで、中は暖房もない。もちろん電気もない。そんなところで重油をたいて明かりをとる。したがって、

兵隊はすすで真っ黒けの顔で、目だけぎよるぎよる出して、歯も磨かない、ふるにも入らないのだからシラミがわき放題。食べ物は、たばこ大の黒パン一個と塩水に菜っ葉が二、三枚浮かんだようなスープ。これは体験者は皆そういうふうな体験をしてきたわけです。

何といつてもシベリア抑留で私が感じているのは、やっぱり腹が減ったということが一番苦痛なんです。作業とか、あるいは寒さとかはある程度のげますけれども、我々食べ盛りの青年は、食べないということがいかに苦しいかという異常な体験を受けたわけでございます。シベリア抑留は、日本軍あるいは一般個人も含めて六十万人と言われておりますけれども、その中で約一割、六万人の方が亡くなった。この亡くなった方は、私の見る限りはほとんど栄養失調で亡くなっていると思います。そんなことで、非常に厳しい体験を長らえたのは、自分の体力と、ある程度ずるい点があったために、かっぱらって物を食ったとか、物々

交換で物を食ってきたということで生き延びられたと私は考えております。

作業はゼンナ工場というところに初め出されまして、外からいわゆる三輪車といいますが、車に土を積んで中に運び、石塊せうがいを外に運び出すという仕事で、いかに怠けるかというのが我々の作戦だったんですよ。そのうちにノルマというものがありまして、大変厳しいことで、ノルマを達成しないと食糧を減らす。ただでさえ腹が減っているのに、ますます食糧を減らされるので、どうしたものかということである。いろいろ作戦を練った覚えがございます。

そのうちに食糧倉庫の方に回されまして、当時、ソ連があれだけ戦争で疲労困憊して食糧もなかったんですが、アメリカからどんどん輸入されておったんです。私は驚いたんですが、アメリカは日本とあれだけの戦争をして、まだソ連に武器、食糧を輸出していたんですね。小麦粉、砂糖、バター、あるいは生小麦、トウモロコシとか、そうい

つたものが麻袋に入ってどんどん輸入されて、それを十メートルぐらい倉庫の中に積む作業を随分しました。

ある日、その麻袋が十メートルぐらいあるのが崩れてきて、私は不幸にもその下敷きになったわけです。腰をしたたか打ちまして、歩くこともできない状態になったんですが、ロスケの監視は、おまえは怠けて痛いと言っている、何も傷もないし、はれもそんなにひどくないということで休業を認めない。日本の隊長は、本当にそんなに痛いのなら、掃除当番ということで一人か二人収容所の中に残って、そういう作業をする番にさせてくれたんですが、そうしているうちに今度痛みのために四〇度近い熱が出まして、これは大変だということでもロスケの軍医も認めて、ハバロフスカからポールという方の病院に入院させられました。

この病院がまた昔馬小屋があったという半地下のバラックづくりの建物で、その中に二百人ぐらいの患者がずらっと寝ているんですね。奥の方に

は息絶え絶えの患者が寝ている。手前の方は比較的軽患者がいるということで、毎日一人二人と亡くなるわけです。手当てもなく、あるいは治療の方法もない。院長というのがロスケの軍医少佐で、女医でした。その下に日本の優秀な外科の中尉の軍医さんがおりました。この方が八面六臂の活躍で、我々も軽患者ですから少しは手伝ったんですが、注射も麻薬も薬もないものですから、骨折患者の整復という作業で治療室でギヤーという声我每天のように聞こえた。それでも、そういった麻薬を打たないで手術したり、あるいは整復したりすると治りが早いものですが、栄養失調でオイハの軍の方から来た患者たちは息絶え絶えで寝ているわけです。それでも病院では白パンが与えられたんですが、白パンを渡してやると、食い意地が張っているから死にかかってもかじるわけです。かじった途端にクツと息を飲むという光景が随分ありました。その息絶えた患者にシラミが頭から体じゅう真っ白につくわけですね。本当に生

き地獄というのはあのことでしよう。

そういった患者を毎日一人二人と担架に乗せて、冬は穴が掘れませんから路上で木の枝を死体の上に重ねて、その上に灯油かガソリンをかけて焼いたというのを見ました。本当に情けないやら悲しいやらで。こういう話を人の前でしたことはございませんけれども、こういう実情が実際にあったわけです。

そのうちに軽患者は帰れるんだというデマともない話が伝わってきまして、私は、これはどうしても帰らなければ、こんなところにいたら殺されると。毎日体温をはかるんですが、挟んで三六度ぐらいですつと抜いて、ああ、おれはもう熱が下がったよ、こんなに健康だよということを院長である女医の軍医さんに言っただけを待った。

そのうちに、昭和二十二年の七月ごろだと思えますが、軽患者は帰すというのが現実になって、ついに夢が実現したわけでありました。その間、抑留された方はみんなそうでしょうが、いわゆる共

産教育というか、ソ連の国家はいいんだ、スターリン万歳だとスターリン賛美の教育、それから労働歌の合唱、そんなことを毎晩のように疲れた体に教えられた。ところが、年とった兵隊などは歌も歌えないから、おまえは反動だと。歌が歌えなくて何で反動だと私は思ったんですが、そういうこともありましたし、とにかく皆帰りたいために、スターリン様々ということに教えを受けたということでございます。

いずれにしても、もう六十年たちましたけれども、いまだに私はその傷の痛みが残っておるわけでございます。こういった戦争の悲惨さというのは今の若い人には余り実感がないと思いますし、当時、我々は、教育がいいか悪いかは別として、とにかく国のために、天皇のために尽くすんだという教えを受けたわけですが、今の教育と見れば、この反動で、国なんかどうでもいい、個人主義ということが今の社会の悪影響。殺人が毎日のようにありますね。昔はこんなことはなかったんです。

そういったことも私は考えております。とにかく教育がいかに大事なものであるかということで見み感じと感じておりますが、この戦争の悲惨さを後世に伝えるのが我々年老いた者の務めだと思っております。

シベリア抑留記

鳥取県 森田 東明

はじめに

終戦から六十年近くたった今日、学業を六カ月繰り上げて卒業し、直ちに兵役に就き、その間、いくたびか生死の岐路に立ち、幸か不幸か生き延びて今日、この日本の繁栄を見ていること、誠に感無量なものがある。亡き戦友の分までも働き続けて五十有余年、光陰矢のごとく、いつしか八十歳を越す年となった。

戦争を知らない我々の子孫に、二度と味合わせではならない、この貴重な体験を記録し、またソ連という国はいかなる国か？を永く後世に留めおくことは、我々生き残って帰還した者の責務であり、犠牲になった数多くの戦友達に報いる供養であると思うのである。しかし、われわれが歩んだ青春の体験を若い人の価値観で理解することは、